

「授業備品」N09 H.27.10.19 (学力の向上)

2030年、今から15年後の社会はどうなっているだろう。少子高齢化が注目されるが、ITの進化による社会構造の変化は大きいと思われる。予想されるのは、現在ある職業のいくつかが消え、新しい職業が出てくることだ。こうした中で学校教育に問われていることは何だろう。

IT社会の変化に対応できるような子供、すなわち主体的・協働的に生きていけるような子供を育てることが学校に求められている。子供の未来を保障するためにも、全国で通じるような学力を学校で身につけさせてやりたい。全国学力・学習状況調査はそのための目安だ。

1 N県に学ぶ

(1) 全国学力・学習状況調査の結果 (N県HPより, 10月下旬訪問予定)

「小学校については、算数Aが全国平均を僅かに下回ったものの、他の教科・科目は全国平均を上回り、概ね良好な結果となりました。中学校については、国語Aは全国平均を若干上回りました。国語B、数学A・B、理科は全国平均を下回ったものの、差はすべて1ポイント以内に収まり、回復の兆しが見え始めていると考えております。

小、中学校いずれにおいても一定の成果は上がっていると考えますが、さらなる学力の定着・向上に向け、取組の充実を図るとともに、学力向上外部検証委員会を設置し、来年度以降の施策の立案に生かしてまいります。」

2 N県と全国平均正答率の比較(公立)

年度	平成 27 年度			平成 26 年度		
教科	全国	N 県	全国との差	全国	N 県	全国との差
小学校						
国語A	70.0	70.4	+0.4	72.9	72.6	-0.3
国語B	65.4	66.4	+1.0	55.5	57.0	+1.5
算数A	75.2	75.0	-0.2	78.1	79.1	+1.0
算数B	45.0	45.4	+0.4	58.2	59.0	+0.8
理科	60.8	61.3	+0.5			
中学校						
国語A	75.8	76.2	+0.4	79.4	79.7	+0.3
国語B	65.8	65.0	-0.8	51.0	49.4	-1.6
数学A	64.4	63.5	-0.9	67.4	67.2	-0.2
数学B	41.6	40.6	-1.0	59.8	58.1	-1.7
理科	53.0	52.8	-0.2			

(2) 分析

ここ数年、甲信越の自治体と関わってきた。その中で学力向上に関わる大きなヒントをいくつかいただいた。全教科で下記に記述する取り組みを確実に実施すれば、小も中も大きくマイナスの数値を出すことはないことを学んだ。要は、危機感があるかどうかだ。

- ・学力の数値は、小も中も大きく変わらない。小学校での学力を中学校が確実に引き継いでいる。
- ・授業研究会が多く、校種を越えて小中の教員同士が学びあっている。
- ・「授業過程スタンダード」が統一されつつあり、独自のスタンダードを持つ学校が増えてきた。

2 学力の向上 (子供の未来を保障する学力を学校がつけてやっているか?)

(1) 全国学力テスト 課題解決型学習、小中とも6割超導入 積極校ほど高い正答率 (各種の報道)

～今回の全国学力テストでは、小中学校で子供が自ら課題を発見して解決する「アクティブ・ラーニング」と呼ばれる課題解決型学習の実施状況を調べた。小中ともに6割以上の学校が授業に取り入れており、熱心に取り組んだ学校は、行っていない学校より平均正答率が高かった。

学力調査と同時に行われた学校側への質問紙調査の中で、前年度までの授業で「児童生徒が自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動」を取り入れたかどうか尋ねたところ、「よく行った」と答えたのは、小学校17・4%、中学校12・7%。「どちらかといえば行った」との回答を加えるとそれぞれ73・0%、63・6%まで増加する。

国語、算数・数学、理科の計 10 科目全てで、熱心に取り組んだ学校ほど、学校の平均正答率が高かった。よく行った学校と、全く行っていない学校の間では、最大で小学校 6・7 ポイント（算数 A）、中学校 7・9 ポイント（数学 B）の差が生じた。

アクティブ・ラーニングは、平成 32 年度以降に小中学校で全面実施される次期学習指導要領に本格的な導入が検討されている。今回の結果を受け、文部科学省は「今回の結果のみでは『アクティブ・ラーニングを行っているから結果が良かった』とは判断できないが、学力が伸びているところをみると確かにそうした指導を行っている傾向がある」としており、さらに効果の検証を進める考えだ。～

(2) 方向性

これまでの学力向上策は、学力だけに視点を置く対処療法が多かった。学力向上プランを作成しても学力が向上しなかったのはそうしたことが原因である。そこで学力向上を本質論から考えるとよい。何年かけて伸ばすのか、時間の確保をどうするか、どんな組織で向上させるのか、こうした視点に立つとよい。小中高の学力向上の一体化策も考えられる。

(3) 単独実施の限界

「小学生の学力は向上したが、中学生はこれからである」という県がある。この背景には、小中高、それぞれが単独で取り組むのが当たり前であるという常識がある。地域の学校に通う子供たちは小中高、別々な学力向上策であってはならない。単独で学力を上げるという考え方から、校種を越え地域の学校全体で取り組むとよい。

(4) 学力向上の基本的な考え方

学力が向上しなかったのは、学校の仕組みに課題があったと受けとめる。その上で、新しい施策にチャレンジする。基本となる考え方は、次のようになる。

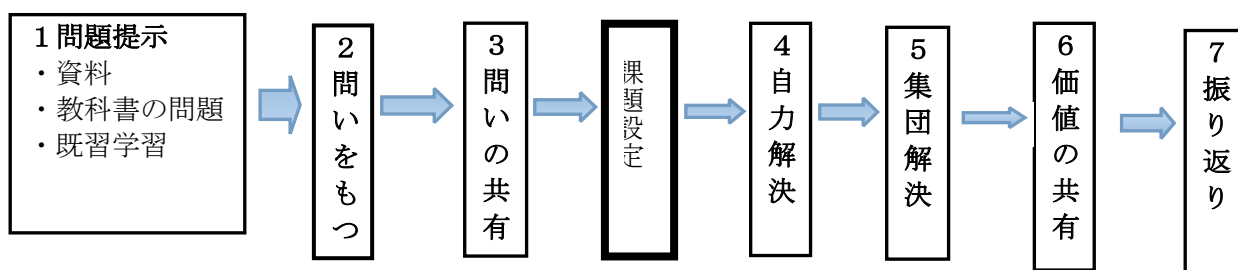
- ・教育課程や学校組織をリニューアルし、子供と向き合う時間を確保する。
- ・学校行事を工夫し練習量を減らす。「練習、練習、本番」は止める。学校行事が多い学校は、教師も子供もそのことに追われ、教科学習はその後となっている。
- ・会議を減らし、子供と一緒にいるようにする。
- ・「教師は子供が分かるまで情熱をもち教える」という基本に立ち返る。
- ・授業時間のカットは行わない。標準時数より、多くの授業時数を保つ。
- ・小中高で縦系列の指導方法を統一する。
- ・講義調から子供同士の協働的な学びの授業へ変える。（アクティブ・ラーニング）

3 学力向上の具体策(下記の順に実践する)

(1) 授業

教師集団全体の力量を高めるために、「授業過程スタンダード」で授業の充実を図る。（模擬授業、授業交流、ワークショップ 型協議会、OJT（若手育成）等の取組み、小中連携）

・問題や既習学習をもとに「問い」をもたせてから課題設定をすることがポイント



協働的な学びは、事象を「共有」することがポイントとなる。①「問題提示」で気付いたことを出し合い、そのことを共有する場面 ②「問いの共有」で解決の見通しを仲間で共有する場面 ③「集団解決」でペアや班で仲間で教えたり教わったりする共有の場面 ④「価値の共有（まとめ）」で仲間のまとめたことを共有する場面 ⑤「振り返り」で仲間から学んだことを共有する場面等が主となる。

これまでの「一人学び」だけではなく、仲間で「協働して学ぶ」授業スタイルが中心となる。教師が子供に任せれる授業がアクティブ・ラーニングのゴールとなる。一朝一夕には出来ない。

(2) 重点授業過程スタンダード

- 1 講義調の多弁(スモールステップ)を止める。
教師が教える学びから、子供同士が仲間で学び合う学びに変える。
- 2 言語わざ(スキル)の導入(言語活動)
- 3 班活動の重視(協働的な学び)
- 4 授業進行係りの導入(協働的な学び)
- 5 「考察(交流)」を行う(協働的な学び) 以上の5点をやりきる!

(3) 学習タイム

全学年、学習タイム年間計画表を作成する。組織的に実施取り組む内容は、A問題とB問題をバランスよく設定(朝の学習タイムの例、月・火は国語A、水は算数A、木は国語B、金・土は算数B、日・月曜は他教科。昼の学習タイムも朝と同様A・Bを一日おきに行う。放課後も学習タイムを位置づける。)とする。B問題を行うための時間を確保する。テキストは、過去問題のA・Bを主に行う。A・B問題の年間計画表を作成し、担任任せ、学年任せとしない。

(4) 短期間の検証

CとAを繰り返す。さらに検証で結果が見られない時は、すぐ改善を図る。学テ実施翌日は課題解決日とし全員で指導する。(一日授業をストップする。)

(5) 書く活動

自分の考えを書く時間を授業(自力解決、友達の考え、振り返り等)の中に位置付ける。毎月1回、作文の時間(行事・教科等)を設定する。文を繰り返し推敲させ、清書することを取り入れる。字数制限、条件に合わせて書く活動、定期テストに記述式問題を取り入れる等を工夫する。これにより無答が減る。

(6) 個別指導の充実

放課後にできるまで再テストを繰り返す。わかるまできめ細かに指導する。担任だけでなく、全教師が協力して指導する。

(7) 家庭学習

「家庭学習の手引き」を配布し、家庭と学習方法について共有する。「授業→家庭学習→次の日の学習」のサイクルを重視し、学習意欲をもたせる。

(8) 問題の解き方の指導(全校で統一)

①「問い」からも読んでみる ②選択問題は「選ぶ」方法と「消去」から見付ける方法がある ③問題文の「問いかけ」や「条件」にしるしを ④条件にあっているか見直しをする ⑤できる問題を先に ⑥迷っても近いと思うものを書く。

(9) サマースクール

各学校に共通したドリルが備えられれば、サマースクールはどの会場でも出来る。子供たちは、一番近い学校に行き受講することができる。なお、教師に負担がいかないようにボランティア制度を整える。とよい。中学生が小学生の採点、高校生が中学生の採点などが考えられる。地域ぐるみで取り組む制度が出来ると学校や地域が活性化する。

(10) 学力調査のマネジメント

学力の調査の結果を、即、分析・事後指導をすることで、学力の向上につなげる。子供は学力調査後に、写し用の解答用紙に写す。回収後、全教師と答え合わせをする。全校体制で取り組むため、各教室に2~3人の教師を配置する。学級担任は誤りが多かった問題を中心に解説を行う。T2・T3の教員は、個別指導を行う。子供は、学習の成果と課題を客観的に捉えることができ、以後の学習に対するめあてをもつことができる。

4 授業過程スタンダードの工夫(群馬県高崎市教育センター)

- ・問いの共有では、班や全体で、解き方や大よその答えの見通しを立てる。
- ・自力解決が困難な子が多いときは、早いうちに班や全体で「教え合い」をする。
- ・情報交換タイム(ノート展覧会・ペア学習)を自力解決後に行い、解けない子を減らす。
- ・情報交換タイムの後、ノート等の加除訂正を行い、全員が何らかの考えをもつ。
- ・全体での学習時間を減らしても班学習等の「教え合い」を大事にする。